

ドストエフスキーの人間観察眼

小嶋祥三

ご存知のように、『カラマーゾフの兄弟』はドストエフスキーが「死の家」で経験した「父親殺し」の冤罪が下敷きになっている。「犯人」は貴族出身のイリインスキーで（小説では名前は出てこない。貴族階級の囚人は名前を伏せるようである）、ドストエフスキーが監獄でかれと一緒にいた頃は、まだ冤罪とは分っていなかった。

この囚人イリインスキーのことは、囚人たちが自分の犯した罪に呵責の念などまったく持っておらず、自分は正しい、社会が間違っている、としか考えないという話の延長に出てくる。その後、刑罰が無効であるという話題になるが、それにはふれない。監獄では殺人などの恐ろしい犯罪が明るい笑い声の中で語られていた。そして、その極端な例として、この囚人の話がでてくる。ドストエフスキーはこの囚人のことを忘れることができなかった。かれの「父親殺し」に違和感を持っていたからである。

監獄でこの囚人はいつも上機嫌で、はしゃいでいた。かれは放蕩息子で軽薄でめちゃくちゃで、思慮がない男だった（ドミートリイの一面と重なる）。遊びまわると、借金をつくるで、父親は息子に手を焼いていたようだった。その父親が突然行方不明になった。息子はこれ幸いと放蕩の限りを尽くし、一月後になって警察に父親のことを届け出た。ところが、それまでの行状がたたってか、否定したにもかかわらず、かれ自身が「父親殺し」の犯人とされ、監獄送りとなった。

この囚人は「自分が殺した」父親のことをしごく普通に話題にした。確かに、「明るい笑い声の中」で語った。ところが、ドストエフスキーはこの囚人にとくに残忍なところを見出せなかった。ドストエフスキーは囚人の「父親殺し」に犯罪を越えた身体や精神のゆがみを考えている。要するに、ドストエフスキーにはこの犯罪、犯人が腑に落ちなかったのである。しかし、この囚人と同郷の者から「父親殺し」の「真相」を詳しく聞き、ドストエフスキーはその話を信じないわけにはいかなかった。だが、この囚人はドストエフスキーにとって、どうしても忘れることができない（と、ドストエフスキーは書いている）、特別な存在となった。

話はここで終わらなかった。ドストエフスキーが4年の刑期を終えた後と思われるが、囚人イリインスキーの「父親殺し」は冤罪と分った。別に真犯人がいたのである。この知らせを聞いたドストエフスキーは、自分が感じたこの事件に関する違和感を再確認しただろう。この経験は『カラマーゾフの兄弟』の誕生に深くかかわっているはずだ。そして、われわれはドストエフスキーの人間観察の確かさに感心する。